

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

#### 研究会基本情報

タイトル：「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」(平成27年度第1回研究会)

日時：平成27年7月5日(日曜日)午後14時より19時

場所：AA 研306室

報告者1：末近 浩太(立命館大学)「「ポスト・アラブの春」期の東アラブ地域におけるイスラーム主義」

報告者2：床呂郁哉(副代表、AA 研所員)「フィリピン南部のムスリム分離主義運動におけるイスラームと(エスノ)ナショナリズム-モロ・イスラーム解放戦線(MILF)の活動を中心に」

概要：当日は平成27(2015)年度の第一回目の研究会であるため、まず同研究課題の副代表の床呂郁哉(AA研所員)より本年度の簡単な研究計画の説明と、今回からの初参加者の自己紹介に続き、いくつかの連絡事項のアナウンスを行った。

その後、末近 浩太(立命館大学)と床呂郁哉の2名による研究報告と、各報告内容に関して参加者全員による活発なディスカッションが行われた。各報告の概要は下記の通りである。

報告1：

「「ポスト・アラブの春」期の東アラブ地域におけるイスラーム主義」

末近 浩太 (立命館大学)

本報告は、2011年の「アラブの春」以降の中東地域、特に「旧い中東」と呼ばれる東アラブ地域におけるイスラーム主義 (Islamism) の思想と活動を手がかりに、その実証研究およびイスラーム主義研究一般に関する理論研究への一視座を提示することを目的とする。

東アラブ地域は、思想としてのイスラーム主義の揺籃の地であると同時に、ムスリム同胞団、ハマース、ヒズブッラー、そして「イスラーム国」など現実の政治組織・社会運動による活動が活発な場所でもある。これらは、イデオロギーとしてのイスラームを標榜するイスラーム主義者 (ないしは政治的イスラーム (political Islam) ) としての性格を共有しながらも、各国の政治や国際関係のなかで位相を大きく異にしており、また、その位相は時とともに常に移り変わってきた。

2011年「アラブの春」による世俗主義政権の崩壊は、チュニジア、エジプト、イエメン、リビア、シリアにおいてイスラーム主義者たちの平和的・暴力的な台頭を導いた。このことは、イスラーム主義が、今日においても市民から一定の支持を集めていることを示唆している。

政治的自由のなかでのイスラーム主義者の台頭という中東政治の新たな変化は、しかしながら、彼ら彼女らが再び「セキュリティゼーション」の対象となることで、まもなく終わり告げることとなった。そこで立ち現れたのは、イスラーム主義の取り締まりを名目に世俗主義の独裁政権が正統性を誇示するという、古い中東政治の姿であり、また、国際社会による中東政治の管理のための「常套手段」であった。エジプトの軍政の復活（国際的な経済援助）、シリアのアサド政権の存続（国際的な消極的承認）が、こうした事態を象徴している。

いずれにしても、確かなのは、イスラーム主義がこの地の政治、広くは中東政治においての不可分の主体的構成要素であり続けてきたことであり、また、それゆえに、イスラーム主義研究という1つの研究領域をかたちづくってきたことである。

しかし、現段階では、イスラーム主義研究は、歴史学、社会学、人類学、政治学、国際関係論、安全保障研究などの（結果的な）集積に過ぎず、それぞれの関心や目的に引きつけるかたちで個別の事例研究が行われているのが実情である。他方、「イスラーム原理主義」の概念を用いた比較研究や理論化の試みもなされてきたが、過度の一般化が個別の事例の実態把握を阻害するような事態も生じている。

今や現代世界の一風景となったイスラーム主義。その研究はどうあるべきなのか。どのような課題や展望があるのか。本報告では、東アラブ地域の事例から、これらの問題を考えてみたい。

報告2：「フィリピン南部のムスリム分離主義運動におけるイスラームと(エスノ)ナシヨナリズム-モロ・イスラーム解放戦線(MILF)の活動を中心に」

床呂郁哉(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

今回の報告ではフィリピン南部における「モロ」と総称されるマイノリティ・ムスリムによるムスリム分離主義運動と、その運動に関連したいわゆるミンダナオ紛争をめぐる動向に関して報告を行った。とくに、現在のフィリピン南部の分離主義運動における最大の武装組織であるMILF(モロ・イスラーム解放戦線)に焦点を当てて、MILFの運動における「イスラーム」性の強調と(エスノ)ナシヨナリズムとの(潜在的な緊張を孕んだ?)共存・同時進行について検討を行った。

まずフィリピン南部のムスリム社会について地理的概要ならびにフィリピンの宗教事情の概要について述べた。フィリピンは総人口の90%以上がキリスト教徒(主にカトリック)であるが、ミンダナオ島やスールー諸島などを中心にムスリム(「モロ」Moro)が居住し、その規模は総人口の5-7%前後のマイノリティである。

ミンダナオ紛争の歴史背景としては、米統治期以降の移民政策によるミンダナオ島人口動態の変化によるところが大きい。20世紀初頭から多数派キリスト教徒によるミンダナオ入植が進行し、結果的に先住のムスリムの土地が収奪される過程が進行した。このため1960年代末には土地争いが頻発していった。また1968年のいわゆるジャビダ虐殺

事件( フィリピン国軍によるムスリム兵士殺害事件 )、キリスト教徒移民の自警団によるムスリム虐殺事件とその際の政府軍・警察側の対応( 軍がムスリムを守らずキリスト教徒側に味方 )などが直接の引き金となって、ムスリムによるフィリピンからの分離独立を求める分離主義運動と、それを弾圧するフィリピン政府との間でミンダナオ紛争の発生を招く事態となった。

分離主義運動のなかでは1970年代の初期にMNLF( モロ民族解放戦線 )が分離独立求めて武装蜂起した( 1996年にいったん政府側と和平合意 )。現在はMILF( モロ・イスラーム解放戦線 )が最大の勢力を維持しているが、ほかにもASG( アブサヤフ集団 )、BIFF( バンサモロ・イスラーム自由戦士 )らと国軍の戦闘も間歇的に継続している。報告の後半では現地調査の知見に基づきながらミンダナオ紛争と和平をめぐる現状やMILFの活動に焦点を当てて報告を実施した。とくにMILFが影響地域内の一部で独自の学校、法廷(シャリア・コート)を運営するなど、デファクトのインフォーマルな行政機能を担っている事例や、ムスリム住民への社会福祉的活動( 難民・貧困層への生業支援、教育・医療支援、孤児院運営など )にもMILF系のNGOなどが関与している事例などが報告され、中東のヒズブッラー等の活動との一定の類似性を指摘した。

またMILF関係者への聞き取り調査などを通じて、同組織のグローバルなネクサス、すなわちエジプト、リビア、サウジ、マレーシア、パキスタン、アフガニスタン等との連関と遍歴( 留学、巡礼、亡命、「ジハード」参加等 )各地のイスラーム主義的思想の影

響等などについても検討が行われた。こうした事例を通じてMILFの思想や活動におけるイスラーム主義と(エスノ)ナショナリズムの同時進行とも呼びうる傾向性について検討が行われた。